《定年退職者インタビュー》

法学部　大石裕教授

今年3月31日をもって、法学部の大石裕教授が23年間の母校での教授人生に幕を閉じる。大石教授の専門は主に政治コミュニケーション論、ジャーナリズム論だ。慶大では、政治学科とメディア・コミュニケーション研究所（以下、メディアコム）でゼミを担当するほか、ジャーナリズムに関する数々の講義を行った。

（粕谷健翔）

―現在の心境

大学の理事の任期がまだあるため、感傷に浸る暇はないのが正直なところ。でも、学部のゼミが先日終了し、学生に花束をもらった時は感慨深かった。

―メディアに興味をもったきっかけ

小学生の頃から、新聞を読むことに面白さを感じていた。初めはスポーツ面に向いていた関心は成長するにつれ、政局記事へと移っていった。そんな中、多感な時期に三島由紀夫の自殺という事件に衝撃を受け、社会に目を向けることになった。同時ラルフ・ネーダーの活動を通じて環境問題に関心を持つなど、社会問題に対するアンテナが高まっていった。

―学者の道を選んだ理由

いくつかのメディア企業を受け、その道に進むことも考えたが、ゼミの教授の「好きなことを好きなだけ書きたいなら研究者がいいかも」という助言や大学院に進学した兄の存在が、院進学への背中を押した。

大学院修士課程で研究生活を送るなかで、面白さを感じ、政治コミュニケーションを研究するうえでの自分なりの覚悟ができたため、研究者の道を選んだ。

―学生との思い出深いエピソード

研究とは自分で問いを立て、自分で答えることだが、ゼミに入った当初は、自分で問いを立て、答えを導くのが苦手な学生もいた。そのため、読書、映画鑑賞、旅など、いろいろな経験を積むことを勧めた。メディアや社会に対する見方を広げ、個性的なジャーナリストへと成長をとげた学生は特に印象に残っている。

先日、私のゼミ生だった記者のバイデン新大統領に関する記事を読んだ。その教え子は地に足をつけた取材を通して現在のアメリカに希望の光を連想させる言葉を引き出しており、彼の記者としての成長ぶりをとても嬉しく感じた。

―メディアコムの魅力

メディアコムは慶大のジャーナリスト養成基地として大学内外から高い評価を受けている。所属学部で主専攻として法律や経済、社会学等を学び、副専攻としてメディアやジャーナリズムを学ぶことで、メディアを社会のなかで相対化できる。

―コロナ報道の問題点

今の報道では、医療崩壊の実態が見えてこず、どこか別世界で起きているような印象さえ抱いてしまう。取材の時間とエネルギーをコロナ禍の本当の現場である医療現場に割くべきだ。そのためには、病院の実態を定点観測的に、より深く報道する必要がある。

―今後の人生の予定は

研究では、学説史を書くこと、それから例えば「新聞は三島由紀夫をどう書き、評価してきたか」といった問題について、歴史認識と結びつけながら論文を書いてみたい。

現在はBPO（放送倫理・番組向上機構）の委員やヤフーニュースの会議の委員を務めている。研究者としての立場を忘れずにメディアの現場と関わっていきたい。

―最後に学生に一言

私たちはテレビや新聞、ネットのサイトの情報をそのまま受け入れてしまいがちだが、情報は組織や人の手によって作られ、編集されたものであることを忘れないでほしい。

【プロフィール】大石裕（おおいし・ゆたか）

85年慶大法学研究科で博士号を取得したのち、5年間政府系シンクタンクで調査・研究を行う。その後、関西大学で教鞭を執り、95年に慶大に赴任。最近では、教授として数々の講義・ゼミを担当するほか、慶大の常任理事を務めている。

また、自身の研究成果として、数々の研究書を著し、教科書として『コミュニケーション研究』を出版するなど、多数の書籍の執筆に関わった。

防災を文化に

環境情報学部　大木聖子准教授

2011年3月11日に発生した東日本大震災からまもなく10年が経過する。日本は様々な災害のリスクがある災害大国だ。地震学者で慶應義塾大学環境情報学部准教授の大木聖子先生に、防災について聞いた。

○震災からの10年を振り返って

震災発生前より、大木先生は、科学者と社会のインターフェースとして、地震科学の研究成果を発信してきた。震災当時、街を襲う津波をテレビの前で見ながら、本当にこれを想定して、人に地震の話をしてきたのかと大きな責任を感じていたという。

東日本大震災を機に、防災教育への関心が高まった。大木先生は、防災教育の位置づけについて、「震災以前、防災教育は必要性が理解されず、頼んでも協力してもらえなかった。震災後、急激に防災教育が重要な位置づけになったことは良いことだと思う」と語る。

地震計について子どもたちに教える
大木聖子准教授

学校での防災教育が進む一方で、学校以外の場所での防災が進まない点が課題だ。

「例えばごみの分別は私が小学校の頃に始まった。学校にごみ箱が2個できたことで、子どもが『何で家にはごみ箱が2個ないの？何でこれとこれを一緒に捨てているの？』と疑問を抱くようになり、瞬く間に文化として定着した。ごみの分別同様、防災も学校教育から家庭への広がりが目指される。だが、震災から10年経っても、防災意識の向上の機会は、主に学校だけなのが現状だ。家庭も含むあらゆる場所での防災文化の定着に向けた道のりの半分も来ていない」と、防災意識を学校から家庭へと広めることの難しさを語る。

○備えが地震被害を解決する

首都圏で地震が起こった場合、政府が発表した想定では、最大2万3000人が死亡、火災による被害が41万棟に及ぶとされる。停電や断水、交通インフラの麻痺も懸念される。

「地震の被害の多くは建物による。でもこれは技術的に解決できる」と大木先生は語る。日本では耐震性のある建物を建てる技術の法整備もなされている。

阪神・淡路大震災では、犠牲者の死因の88％は家屋や家具による圧死で、残りの12％のうちの10％が火災だ。家の倒壊と家具の転倒を防げれば、初期消火をして火災も防ぐことができる。残りの2％は、避難途中や避難後に死亡した者で、その死因が災害に関連していると認められる災害関連死だ。その原因として、避難所の寒さや、人工透析などの生命維持に必要な医療が受けられないことが挙げられる。災害関連死は、十分な備蓄をしておいたり、家屋の倒壊を防ぐことで、道路を救急車などの緊急車両が通行できるようにしたりすることで解決する。「家を補強して、家具を固定するだけで被害は軽減できる。昔は地震で人が亡くなってたの？と子供世代に言わせることも可能だ」と防災の意義を語る。

○塾生ができる防災

防災行動は気持ちよく」というのが大木先生の考えだ。「実際に防災行動を起こした家庭を調査すると、『久しぶりに子どもといろいろなことができた。それが防災対策だった』と話してくれた。防災は、未来のマイナスをゼロにしかできない。倒れるというマイナスがゼロで収まっただけに思えるかもしれないが、その行為をすること自体が、今、プラスになる」

プラスを見つけて防災行動を起こす。防災を目的ではなく手段にすることが大事だ。突っ張り棒をつける・水を買うなどはじめの一歩はなんでもよい。今日から、家の防災対策を始めてみてはいかがだろうか。

（高橋明日香）

記者の日常（2）

プライドと反抗

夜中にならないとやる気が湧かないのに夜中になると元気が出なくなるから困る。

◇◇◇◇◇◇◇

通らなかった試験、諦めた夢を思い出すたびに自分が何も成し遂げることのできない小さな存在であるような気がしてため息が出る。理想が高すぎる、考え過ぎ、誰もそこまで期待していないのに自意識過剰だ……たくさんの励ましやお叱りの言葉をいただいてきたが自分の性格をなかなか変えることができなくて、悲しい。こう書いてみると向上心が高く勉強熱心な人間にも見えるがそういうわけでもない。見合わぬ結果ばかり求めていることを自分でも自覚している。

先日、「私ってプライドが高いのかな」と友に相談したところ、「あなたはプライドが高いのかもしれないがそれ以上にプライドを傷つけられることに慣れていないのでは」と言われた。そうかもしれない。私は叱られたり怒られたりすることがとても苦手で、そうならないよう危険を回避して生きてきた。怒られたり叱られたりしなければプライドを傷つけられる機会も減る。

◇◇◇◇◇◇◇

しかし、「反抗しないで生きてきた」という一見正しそうな事実が最近すごく重たい。この事実は自分の自主性のなさを表しているとすら思う。叱られ慣れている人たちは総じて反抗してきた自分の過去を誇りに思っている。教師から嫌われていた、と得意げに話す相手を前に、私は「すごいね」と相槌を打ちつつも内心は尖ってるなあ、と上から目線に笑っていた。しかし、内心の内心は彼らがうらやましくて仕方なかった。たとえ無意味な反抗であっても、自らで決めた道以外歩きたがらない人たちは接していて猛烈なパワーを感じるからだ。自信がある。誇りがある。私だってそうなりたい。

◇◇◇◇◇◇◇

私は今、大学生にして遅めの反抗期を迎えている。黙っていれば良いのにわざわざ反抗したがる人たちのことが不思議でたまらなかったが、今なら尾崎豊の気持ちすら理解できる。けれど、大学生にもなって反抗期で足踏みしている自分と一生懸命頑張る周りとを比べてさらに弱ってしまう。

こんな夜は早く寝るに尽きる。どうせ朝起きたら思い悩んでいたことなどどうでもよくなっているのだから。そういえばとても好きな言葉があって、嫌な夜はその言葉を何度も反芻する。嫌な夜の特効薬だから調子がいい時は見ないようにしている。その言葉に助けてもらうことができるから、嫌な夜も嫌なことばかりではない。いや、やっぱり今日は嫌なだけの夜だな。悲しいし。寝ます。

（M・K）

広告

ドーミー綱島駅前で温かい交流を！

東急東横線の綱島駅から、4分ほど歩いた場所に「ドーミー綱島駅前」はある。「ドーミー綱島駅前」の目の前にある広い道をまっすぐ進むと、慶大日吉キャンパスにたどり着く。日吉キャンパスに通う慶大生にとっては最高の立地である。駅前という立地上、コンビニやスーパー、病院がすぐ近くにあり、初めて寮生活を送る学生が安心できる環境だ。また、近くには鶴見川もあり景色がとても良い。コロナ禍により自宅で過ごす時間が多い日々だが、河川敷でウォーキングやランニングをして、気分転換もできるだろう。

玄関はオートロック仕様で、寮生は専用ICキーで入れるようになっている。2階に食堂や管理人室があり、3～9階が学生たちの個室となっている。

食堂では月～土、朝・夜と食事をとることができる。食事メニューは専任の管理栄養士が栄養バランスを考慮して作っており、そのレシピを使って寮母さんを中心に、出来立ての食事を提供している。大学生になると勉強やアルバイトで忙しくなり、食事をとり忘れてしまうという学生も多いが、ここでは帰宅すればおいしい家庭料理をゆっくりと食べることができる。朝食は洋食・和食で好きな方を選べる点も良い。

また、食堂では感染対策を行いつつ他の寮生とも一緒に食べることができるため、自然と友達の輪が広がるのだという。コロナ禍で対面授業やサークル活動に制限がある中、心を許せる友達を作るのは難しい。しかし、ここでは、食堂で毎日顔を合わせるうちに自然と仲良くなることができる。親しい友達と毎日食べる食事は、より一層おいしく感じるはずだ。

ドーミーでは例年、ウェルカムパーティーやバーベキュー大会、クリスマスイベントなどが開催され、学校や年齢、国籍関係なく交流できる。インターンシップや就活支援セミナーといったイベントも多くあり、就活を控えた学生には非常に心強い。

怪我をしたり病気になったりした時、常駐する寮長夫妻の温かいサポートがあるのも安心だ。食事を部屋まで運んだり、病院や救急車の手配をしたりしてくれる。部屋はバス・トイレ・キッチン・エアコンがついた、完全個室タイプだ。生活に必要な家具やWi-Fiも設置されており、引っ越した日から快適に過ごすことができる。そして、「ドーミー綱島駅前」の部屋は広いのが特長だ。それぞれ思い思いのプライベート空間を作れるだろう。

現在ドーミーは、新型コロナの影響を受けて経済面で苦慮する学生を支援する「就学支援プログラム」を実施している。新型コロナで人の交流が減る中、「ドーミー綱島駅前」でリアルな温かい生活を送ってみるのはどうだろうか。

頑張るあなたにピッタリ！

プライバシーを重視した居室と共用設備が充実した、安心・安全な

食事付 学生寮（ドーミー）

男女寮 DORMY（ドーミー） 綱島駅前（つなしまえきまえ）

月額寮費 ~~82,700円～~~ 62,700円～

室数限定 夢支援制度適用で月額2万円補助

物件詳細はコチラ

Access 日吉駅まで電車で約2分

お問い合わせ・見学のご予約・お申し込み・管理運営
株式会社 共立メンテナンス 学生寮事務局
〒101-8621 東京都千代田区外神田2-18-8 営業時間／9:00～17:30（年末年始を除き無休）
フリーコール 0120-88-1030（ドーミー）
よい朝のために。 KYORITSU HOTELS & DORMITORIES

オンライン見学はコチラ！

YouTubeにて公開中！

ドーミーを安心してご利用いただくために

ドーミーでは、ご入居者様の安全を第一に考え、新型コロナウイルス感染防止対策に日々取り組んでおります。

新しい生活スタイルをドーミーが支援 就学支援プログラム

01 申込時の契約金 準備不要 保証金免除
02 2食付きの寮費が 月々3万円の分割払い
03 分割手数料が 実質年利0.0% 手数料は不要

●お問い合わせ先：株式会社 共立ファイナンシャルサービス
TEL.03-5295-7992